

やわらかな感性と
自由な発想で生み出される
それぞれの白磁のかたち。

庭むこうにある山では山菜がとれ、
工房横には、さらさらと川が流れている。
静かでのどかな空気の中で、白に向き合う二人の作家がいる。
心の奥底から湧き出る思いを形にする伊藤さん。
繊細で奥行きと深みのある白。

一方、自由な発想で動きのある作品に取り組む長谷川さん。
白は白でもいろんな表情の白がある。
二人は、それぞれのアプローチで白磁の美を追い求めていた。

文／中川知英



「練彩鉢」4万円。

心が入っているからこそ生み出される、
色香を感じる、やわらかな曲線。

陶芸家 伊藤秀人さん



「練彩鉢」3万円。

人 は何に心惹かれるのだから、
うか。モノと対峙した瞬間、心に跳ね返ってくる衝撃。それは、決して理屈では語れない。

「白磁の鶴首の花生をつくっていて、自分が納得できるフォルムができたんです。よし、これと同じかそれ以上のものをもって、割合を計算しながらつくると、なぜか形がくずれません」と伊藤秀人さん。割合は同じなのに、どこが違うのか。「何を感じてつくったのかを思い返してみると、口元に花が開いたような瑞々しさをあらわそうと思っていたのに気がついて」。色香を感じるやわらかな曲線は、心で感じたものが手へと伝わったからこそ生まれたラインだったのだ。だからだろうか、伊藤さんの作品には、生き物をもつ体温のような温かさを感じる。練彩もそう。とても伸びやかで呼吸しているかのようだ。

「子どもが拾ってきた貝を見て、なんと美しいのだろうと。こ



なめらかで色香を感じるフォルムの「白磁花生」6万円。



花びらのようなやわらかな雰囲気を持つ「白磁花鉢」8万円。



指に神経を集中させ、やわらかく轆轤をひく伊藤さん。



「青瓷鉢」3万5000円。



「青瓷平鉢」1万円。



「青瓷ぐい呑」1万2000円。



「白磁梅瓶」16万円。

ではなかったという強い自信ももらえたような気がして」。

子どもがうれしさのあまりピョンピョン飛び跳ねるように、伊藤さんの声も大きく弾んでいた。その弾んだ思いが、どう作品に表れるのか。何を伝えたいか、気持ちの入った作品は、見る側にしっかりと伝わるはずだ。

●プロフィール
伊藤秀人 1971年岐阜県多治見市生まれ。1991年多治見市陶磁器意匠研究所修了。

●松坂屋名古屋店 美術画廊
5月30日(水)～6月5日(火)

釉薬の美しさと、深みにはまって始めた、青瓷の世界。

やきものの里、多治見に生まれ育った伊藤さんにとって、やきものは身近な存在だった。「普段は、大量生産のやきものをつくっている大人たちが、休日に関心を持って作品をつくり、それらを見せ合

ながら、いいだ悪いだのと楽しんで

博物院を訪れたという。「乾隆帝の陶磁器趣味という特別展を見たのですが、衝撃でした。空気がある迫力を感じました。モノのつ力は凄いなという衝撃と、自分のやっていることは間違い

の表情は、白磁の美しさに結びつけられるんじゃないかと」。そこで考えたのが、轆轤の練込。白磁は、自分の思い描いたラインを轆轤でひき、削り出してあらわしてきたが、ろくろの練込は、思い通りにならない要素ばかり。

「初めは、あー、こんなところに模様が入っちゃった」だったのが、土のかたさ、量、ねじれる回数を調整し、「自分の側に引き寄せていく工芸的な作業」をくり返すことで、中は白く、外側に模様を出すことが可能になった。感動したものを形にしていこう。モノをつくり続ける上で必要なのは、美しいものに反応できるやわらかな感性なのかもしれない。

そうに言い合っているんです。だから、やきものはおもしろいものなんだろうなと子ども心に思っていたんですが、実際、ろくろをひくと、ほんとにおもしろかったんです」。

土の塊が花開くように広がっていく。伊藤さんは轆轤に目覚め、ラインの美しさを大事にしたという思いから必然的に白磁を選んだ。白磁花鉢は、白い大輪の花がたおやかに咲いているようなやわらかさと瑞々しい生命力に満ちている。

「犬を散歩させながら、花や落ち葉をよく見るのですが、近くにむくげの大輪の花が咲いていて、それが頭にあっただけでしょうね。生命力の強い花が好きなんです」。最近では、釉薬の美しさと、深

みにも挑戦している。青瓷をする上で、どこが一番上なのかを見てみたくて、今年の3月に台湾の国立故宫